

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

Title	(第4章)『上方・大阪都市文化の研究拠点形成：新収吉沢コレクションを中心に』より：「旭堂南海師に訊く」(zoom座談会)
Author	旭堂 南海, 西田 正宏, 高橋 圭一, 奥野 久美子
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 34巻, p.67-79.
Published	2022-03-15
ISBN	978-4-904010-49-5
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	上方・大阪都市文化の研究拠点形成：大学アーカイブの整備と発信
DOI	10.24544/ocu.20220516-011

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第4章

『上方・大阪都市文化の研究拠点形成

—新収 吉沢コレクションを中心に—』より

「旭堂南海師に訊く」(zoom 座談会)

旭堂 南海 (上方講談師)

聞き手：西田 正宏・高橋 圭一・奥野 久美子

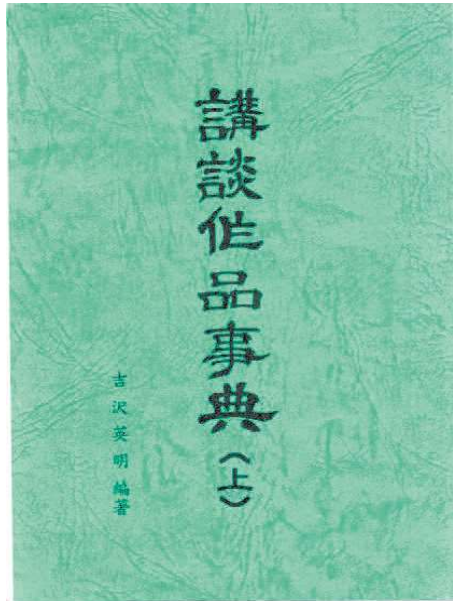
西田 ただいまより第二部の座談会を始めたいと思います。だいたい三十分ぐらいでしょうか、旭堂南海さんにご登壇いただいて、少しお話を伺うという機会を持ちたいと思います。今発表いたしました私が一応司会進行の形で、奥野さん、高橋さんにいろいろ代表としてお聞きいただくことにします。本来ならフロアからもいろいろご質問をいただけたらありがたいんですけども、時間のこともありますので、代表の質問をさせていただくということでご容赦ください。それでは一番最初にですね、私のほうから直球の質問で恐縮なんですけれども、まさにこの吉沢コレクション、吉沢さんの御本と、南海さんの関わりというか、講談師としての関わり方といいますか、そのあたりのところをまず取っ掛かりとしてお聞かせいただければと思います。南海さんよろしくお願ひします。

南海 はい、よろしくお願ひいたします。関西では先年お亡くなりになりました四代目の旭堂南陵という、あの方がたくさん講談の本をお集めでございました。その資料を実は私はこの世界に入った時ですかね、正確には入る前ですがね、お見せいただいたのが、速記本というのを初めて知ることになった時でしょうかね。最初は、その関西の講談の本、速記本といわれるような講談本、これを四代目の旭堂南陵師から見せていただく、そこから自分でも懐と相談しながらですがね、当時はまだ高かったですよ。美本だったら一冊が八千円とか

ね、七千円とか、今ではちょっと考えられないほど高値がついていた時代だったと思うんですがね。なのであんまり買うことができなかったわけですが、それを手に入れて読んでいく、そのうちに東京の、関東の吉沢さんのコレクションが本になっているというのを、やはり知るようになるんですね。そういたしますと、吉沢さんの中に網羅されている講談の本の多さですね、で、講談の本だけじゃないんですよ。雑誌と新聞というものにもう目を奪われましたね。講談の本だけをずーっと読んで、昔の方はこういう喋り方をしていたんだろうか、という想いを巡らせていたわけなんですけど、きちっとした、という語弊があるかもしれませんが、一席物になっているようなものが雑誌にはたくさん入れられている、新聞の連載も、本当に体裁よく一席物の連続みたいになって、面白い山場が毎度毎度作られている、そちらに心を奪われましてから、吉沢さんの著作が出るのを心待ちにするというような話になりましたね。

西田 はい、ありがとうございます。今ちょうどその横に置かれてるもの、はい、それを少しお手に取っていただいて、お話いただければと思うんですけども。

南海 これは高橋先生からご紹介がありました、『講談作品事典』の上中下の三冊（画像①吉沢英明『講談作品事典』上）、もう一冊合わせて四冊になっているんでしょうけれど、これなどは一番役に立つといいますかね、これがなければなかなか講談の深いところまでは知ることができずに、そうですね、（高橋氏が画面で吉沢英明著『講談作品事典 続編』を見せる）今高橋先生が出してくださった『講談作品事典』のあれが四冊目になります。続編ということですね、はい。で、私は例えば講談のネタを、師匠からつけていただくのは、やはり分量、ジ



画像①吉沢英明『講談作品事典』上

ジャンル、ネタ数が、膨大なものが講談にはありますので、師匠がたくさんネタを持っていらっしやったとしましてもつけていただくのは全体の講談の何十分の何百分の一にしか過ぎない、ということになるんですね。もっと他の講談を知りたいそれを口演したい時には、初めに申しあげましたように講談の速記本、これを目当てにするんですけど、闇雲に一冊取って「あ、これいける！」ということはありませんよね。そういう時にこの作品事典は、あいいうえお順の索引にもなっておりますので、梗概がついてますから、どういう話かなというのがよくわかるんですよ。それだけじゃないのが、深みという点になるんですが、例えば、『大塩平八郎』という話をやろうと。師匠（注：三代目旭堂南陵〔1917～2005〕）からは『大塩平八郎』の話はつけてもらわなかったんですよ。で、関東に一席物だけとして『瓢箪屋政談』があるんですね。これも去年お亡くなりになった八代目の貞山先生に、なぜ『瓢箪屋政談』が一席だけ東京にあるんですか、と。関西にも大塩平八郎ものは昔はあったと番付とかいろんな資料に出てはくるんですが、現在それをちゃんとやっているという人はいないんですか、というと貞山先生も、「俺もよくわからないんだ。親父が一席だけつけてくれて、親父もこの一席しか持ってないっていうんだよ」というお話だったんですよ。『瓢箪屋政談』を引いてみたらちゃんここには出るわけですよ。この『瓢箪屋政談』は、どの話と似てるというところまでも出てくるわけなんですよ。これは延広先生などのご研究などにも出てきますから、わかる場所なんですけれど、ちなみに例えばこれ（画像①吉沢英明『講談作品事典』上）で『大塩平八郎』を引きます。『大塩平八郎』を引きますとね、あの有名な『大塩平八郎』の速記本の粗書きみたいなものが始めに出てくるんですよ。で、これは何年の何月にどの出版社から、口演者が誰で速記者が誰で、という本のあらすじですよとちゃんと書いてくださってます。それだけじゃありません。この大塩平八郎に関連するものとして、作品事典の中にはこういうものを入れてますから見てくださいとまで入れてくださってるんですよ。例えば『大塩平八郎』のあらすじが終わったあとには、『瓢箪屋政談』、そして『義犬塚の由来』、『侠客般若坊』、『女行者豊田貢』、『献上煙草』、『言葉の助太刀』、こういうものがずーっと出てくるんです。例えば「えーっ、知らんのんばっか

りだ！」と思って、じゃあこの“義犬の塚”というのはなんだろう、と義犬塚をずっと探していくと、当然義犬塚が出てきますね。義犬塚を見ますと今度義犬塚の最後に、関連するものとしてはこれがあるからこれを見なさい、と。で、また見ていくんですよ。どんどんどんどん大塩平八郎という人物の名前一つとただだけで講談の広がりや深みはずーっと出てくるのが、吉沢さんのこの労作ということになるんでしょうね。

西田 はい、ありがとうございます。高橋さん、そのあたりも含めて、実際、南海さんの話を聞きながら（『講談作品事典』を）引いておられましたけれども、何かお聞きになったりコメントいただけるようなことありましたらお願いします。

高橋 まさに今、南海さんが言われたようなことをお聞きしたかったんです。今の講師に非常に役に立つ本であるということがよくわかりました。南海さんは、吉沢さんの本はそんなに持っておられますか？

南海 所持してるかどうかですか？

高橋 はい。

南海 そうですね、全部じゃありませんけれど、七割、八割ぐらいは持っていると思いますね。吉沢先生に直接、お手紙をお出ししまして、高橋先生が（一つ前のプログラム「吉沢英明氏の人と仕事」で）おっしゃったような鉛筆書きのお返事とともに、御本が送られてきてまして、振り込みをするというのは何度もやりましたね。その中で、高橋先生がご紹介した著作の中で、もう一つこの作品事典とともに大いに役に立ってますのが、大正時代の雑誌目録ですね。

高橋 はい、ありますね。

南海 あれが実は例えば、国立の図書館などでもデジタル化はまだされてないはずなんですよ。で、講談の一席物に仕立て上げよう、本当は続き物なんですよ。で、手近なところで一席物にしたい時には、雑誌の中に入っている一席が、本当にコンパクトで一席物に仕立て上げられているものですから、それをダイレクトに手にするほうがよほど早いんですよ。ただどこに何があるかがわからないという時に、吉沢さんのあの雑誌目録をずーっと見る、ところがその雑誌の現物が吉沢さんのところにしかないんですよ。どこへ行きやこれ

の外題になっているのを見ることができるんだ、吉沢さんのところかぁ…というような話になってしまってるのが、今の現状でもあるんでしょうかね。

西田 ということは今回は、そういう雑誌なども含めて、全て公立大学に入ったということになるんでしょうか。そのあたり奥野さん、お願いします。

奥野 まだどの箱に雑誌が詰まっているかわからないですけど、講談関係の雑誌がたくさんあってそれは全部運びました。運び入れていますので、約六七〇箱の中を全部開ければどこかから出てくると思います。今、南海先生がおっしゃったことで、(画面に画像②を出して) これは吉沢コレクションからではないのですが、大正五年一月の博文館の『講談雑誌』です。今おっしゃったように、雑誌に載っている講談はこういう感じで、基本的に読み切り、でしょうか…？

南海 いや、そうでもないです。『講談雑誌』でしたら、続き物のものも、これはでも全部読み切りになってるかなあ。続き物も中にはあります。



画像②『講談雑誌』(大正五年一月号 博文館)目次 奥野架蔵

奥野 はい。短いページ数でこういう感じで、悟道軒圓玉の『安政三組盃（お玉ヶ池事件）』があったので（注：吉沢コレクションに悟道軒圓玉の晩年の日記や、圓玉の師・二代目松林伯圓の最初期の講談本『安政三組盃』が含まれていることを、「吉沢コレクション受入れ報告」で報告したため）、目次だけスキャンしたのですが、お正月号だから読み切りなのかはわかりませんが、読み切りのものが多いんですよ。

南海 はい。

奥野 （圓玉のページを見せながら）こういう感じで、「圓玉宅手記」とありますけど、読み切れるようなものということです。今の講談師さんでも、師匠から習ってないものを新しく作ろうとした時にはこういうものがすごく役立つということですかね。

南海 そうですね。講談の速記本、特に関西で出版された速記本はいたずらに長いんですよ。だんだん講談は冊数が増えていくんでしょうけれども、意味なく長くしているという。亡くなったうちの師匠に伺ったことがあるんですけど、例えば一冊だけの貸本にするよりも、もう一冊で完結になりますよというほうが売れるわけですよ。なんならもうその次もいこう、だから“蟹江才蔵”というのがあったら、“後の蟹江才蔵”、“その後の蟹江才蔵”、“最後の蟹江才蔵”、たいがい四冊ぐらいになるんですけど、いるところだけぐっと縮めたら本当に三十ページぐらいで終わるというような話。これもたぶん研究者のお話になるんでしょうけれども、じゃあ速記本とかこの雑誌に載ってる講談のネタが、本当にその演者が高座にかけていたものなのかどうか、あるいはその口調が、そのまま演者のものとして認めてよいのかどうかという問題もあろうかと思うんですよ。そういうものも全部鵜呑みにしてしまわずに、こちら側でちょっと疑心暗鬼になりながら考えていくということは、演者側からしても必要じゃないだろうかと思いますね。私の師匠などは、二代目の旭堂南陵という人だったんですが、師匠のお父さんがね。明治の十年生まれで、たくさんの速記本を出されました。で、新聞連載もたくさん出しました。その中で、うちの師匠、息子になりますけど、その息子がうちの親父、二代目南陵の口ぶりを伝えていると評価してよいのは、『大阪新報』に連載した「豊臣秀吉」ぐらいちゃうか

あとということをおっしゃってたことがあるんですね。これは明治の日露戦争のあとに、行友李風という新国劇の作者でもあった方ですが、あの方が肝煎りになって『大阪新報』で若手の旭堂南陵を抜擢して、「太閤記」を連載させるということになったんですね（注：吉沢英明『講談作品事典（中）』『太閤秀吉』の項 P1007 に「※南陵は明四〇年代の〈大阪新報〉〈函館毎日新聞〉等に「豊臣秀吉」を長期連載、又単行本として続々刊した」とある）。で、それが本になっているんですけど、国会にもたぶん全部は揃ってないとは思いますがね。その口ぶりというのが新聞連載だけどうちの親父にこれはそっくりだと、太鼓判を押しておられました。逆にいえば、そのほかはじゃあどうなんだ、ということにも繋がりますからね。このあたりはなかなか悩ましいところではありますね。

西田 ありがとうございます。今おっしゃっていただいたようなことが、ぼくの最初の発表で申し上げたことで恐縮なんですけれども、まさに文献があって、そして研究者がいて、そしてそれに今実際にそんなふうにしてお話をされる演者の方がおられて、その感覚みたいなものが、逆に研究のほうに跳ね返っていくとか、そういう視点が出てくるのかなということを改めて感じました。高橋さん、何かそのあたりのことも含めてお聞きいただければと思います。

高橋 そうですね、今の話とは直接関わらないことなんですけど、あの南海さんにね、古い、例えば今の雑誌（画像②）、『講談雑誌』なんかはたぶん全部一話読み切りなんじゃなかったかと思いますが、それを使って今講談にする時に、結構苦労した話とか、逆にこれはうまくいったなあとか、そういうのどうでしょう、ありますか？

南海 そうですね。

高橋 南海さんから借りた本に、「なんかこれだんだん面白くなるなあ」とかいう付箋が貼ってあったような覚えもありませんけど。（高橋追記：明治四二年（一九〇九）年刊『豊臣秀頼琉球征伐』『冗長にすぎる ちぢめよう』という付箋も有りました。）

南海 分量がありますので、増やした分がたぶんいらないうところとみてよいかもかもしれないんですけど、どこをとってどこを捨ててという、これはもう演

者の感覚になるんです。で、全部とっていくという時にこれは史実だからとりましようという感覚に我々がなってしまうと、もう芸ではなくなる、物語ではなくなる可能性が多分にありますね。講釈師は、本当のように見せかけて実は大嘘なんですよというのが大前提のはずですので、本当のお話をいたしますと言って本当のお話だけやったところで、面白いこともなんともないと思うんですね。ですから、膨らませているところでも、これはひょっとしたら嘘には違いないけれども採用しようかな、というようなくだりをあえて入れていくという作業を私はやっております。昔の講釈師、あるいは速記者が入れ込んだかどうかは知りませんが、入れた感覚を思いながらね、ああ、これはなるほど、ここへこんな嘘を、わかりきったような嘘だけど、これをあえて放り込んでくるようなことをしてるのか。ならそれを、私も踏襲しましょう、というような話で、お話を作っていくのがわりと多いですね、僕は。それが成功するかしないかはまた別の話ですがね。

高橋 明治だと今にそのまま持ってくるのはかなり難しいんじゃないんですか。

南海 はい、明治の例えば二十年代ぐらいまでの速記の本でしたら、恐らくは演者の口ぶりをそのまま伝えているのがだいたいだろうといわれてるのかもしれませんが、そのままを今口演するのは、たぶん難しいだろうと思いますね。具体的に何がどう難しいかといわれても困るんですが、例えば先ほど奥野先生から見せていただいた『講談雑誌』は一席物になってました。正月特番だからかどうかわかりませんが、一席物ですよといいますが、あれを声に出してずっと読んでいだけでも一席はたぶん四十分から五十分ぐらいかかるんですよ。これが口演にかかって最初にマクラのようなものを喋って仕草が入ると小一時間にたぶんなろうかと思うんですね。一席物なのにそれぐらい時間がかかってしまうということは、それ自体でもう昔の一席物と今の一席物というものの時間尺の違いが出てくるんですよ。そういうところがあるかと思えますね。

高橋 ありがとうございます。

西田 ありがとうございます。先ほどの発表で奥野さんが南海さんにお聞き

したいと言った描写のところがあるんですけど、もう一度改めておっしゃっていただければと思います。

奥野 はい、今の、嘘だからといって外したら逆にリアリティがなくなるというのは、そことすごく繋がることかなと思うんですが、先ほど私が（「吉沢コレクション受入れ報告」の）パワーポイントのほうで出させていただいた、芥川龍之介が小説家志望の学生に、「小説家になりたければ講釈を聞け」と言ったと（注：間宮茂輔「芥川龍之介断片」（『新日本文学』昭二五・七）参照）。さらに、小金井蘆洲の講談は「話が描写になつてゐるからね」という言い方をしたと。あの意味をずっとどういうことかなと考えていて、授業で学生さんに勝手に私の解釈を言ったことがあるんですけど。例えばなんですけど、小金井蘆洲の大正になってからの『鼠小僧次郎吉』、芥川龍之介が「鼠小僧次郎吉」という小説を書く時にこれを参考書にしたというものなんですけど、分銅伊勢屋に次郎吉が忍び込むというところで、その忍び込む時のこの戸の開け方だけで十行ぐらいとってるんですね（画像③を画面に出す）。

真ん中あたりの十行ぐらいなんですけど、「庭先へ忍び寄つて縁側の処まで進んで来て、戸にガチガチ当つて見たが、建付が好いのでガタンともしない、抛るなく雪隠の窓を足代にして是から屋根に上りましたが、凍り付いている雪にツルツルと滑つて危なくて仕様がな、四ノ這になつて大屋根へ来ると雪明りの中にパーツと灯りが映つて居る、大きな家屋敷となると」云々とあつて、「障子に手を掛けてグイとやると、最初はバリバリ凍り付いて居て却々取れなかつたが、足の指先で瓦を踏占め力に任せて引くとベリベリと音がしてスーと開きました」このあたりの戸を開けるだけで十数行とる、ものすごく本当に、凍つた雪の夜に戸を開けようとしたら、確かにそうかもしれないけど、本当に見てきたような嘘をと、まさにそういう感じがして、芥川が言っている「話が描写になっている」とは、もしかしたらこういうことかなと、筋は全く関係ないところなんですけど、フィクションにリアリティを持たせるためにはやっぱりこういうところが大事なのかなというのを私なりに解釈してるんですけど、プロの講談師さんからみて「話が描写になっている」というのはどういう感じだと思われませんか。

写というのは場面の描写というよりも、例えば道行の描写ですとか、東海道五十三次ずーっと美辞麗句並べていくですとか、それは平場修羅場というものに凝縮されると思うんですけど、武将のいでたちを兜から足の先までずーんぶ言葉で喋っていくのを描写というんですけどね。で、蘆洲というのはたぶんこれは四代目の蘆洲（奥野追記：ここでの『鼠小僧次郎吉』は三代目蘆洲でした。後の質疑でご指摘を受け確認しました）だと思うんですが、四代目の蘆洲は、私も定かじゃありませんが、早く喋る、人が喋ると十日かかるのを六日五日ぐらいで全部終わってしまうというぐらいの早読みの蘆洲といわれた人だったんじゃないかと思うんですよね。その早読みの人が、そこまで詳しく描写を、その描写というのは講談的な描写と、演者としてですよ、演者としてはそこまで戸を開ける描写をするような話はあるまい聞いたことがないですね。普通講釈の描写は、やってくると“スッ”、まあこんな手もいれない“スッ”、という話なんでしょうけれど、スッと戸が開いた、あるいはなかなか戸が開けづらかったんだがグツと力を入れるとなんとか戸が開き中を覗いてみると、というそういうものがたぶん描写だと思うんです。戸を開けるまでに時間を費やすということでいえば、例えば関西の講談の速記の本は、「頼もう」、「どうれ、どちらから」、「拙者、何々何々」、「あいわかったしばらくお待ち」というとその取り次ぎが次の奥へ入って「今、何々という方が旦那にお見えでございます」、「そうか、ちょっと待っておけ」その男がさらに奥へ行って「ご主人」、「うん、その者が来たか。ならばそう伝えておけ」、「はい、わかりました」とその順番をずーっと取り次ぎが二人三人出てまいりまして、訪ねてきた人が中へ入るまでに十行ぐらい文字を使うということは、速記本の中には当たり前のようにあるという、これは始めに申しあげましたように冊数を増やして顧客にお金を使わせるという、そういう手だったとこれも亡くなった師匠が言ってたんですけどもね。ただその、ひょっとしたらその描写を蘆洲がやっていたのかもしれませんが。これは速記はどなたになってますか。

奥野 加藤…。

南海 由太郎。

奥野 はい。

南海 この蘆洲の鼠小僧の古い版とか、これの原版とか、元版はどこまで遡れるとかいうのはあるんですかね。

奥野 これも吉沢先生の本で探しましたら、博文館〈長篇講談〉の鼠小僧は新聞連載がありました（奥野追記：吉沢英明『講談大正編年史』P72）。

南海 それも明治ですか、大正ですよ？

奥野 大正だったと思います（奥野追記：博文館長篇講談の『鼠小僧次郎吉』は、「東京毎夕新聞」に大正5年2月4日～同年9月18日まで小金井蘆洲講演、加藤由太郎速記「和泉屋治郎吉」の題で連載された本文を元に行っている。拙論「芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」—講談本との関わりについて—」（『日本近代文学』第73集）より）。

南海 そうなりますと、ほんとに演者が喋ったのを速記者加藤由太郎が書いたのか、悟道軒圓玉のような方、これは高橋先生にお聞きするのが一番当たりよいかもかもしれませんよ。

奥野 はい。

西田 高橋さんいかがでしょうか、今の南海さんからの発言について。

高橋 今のところは確かに冗長な感じがしてますね、小金井蘆洲のは。あの、描写になってるといえるのは要するに情景描写とか、心情描写もできているということだろうと思いますね。普通講談は筋を語るのが主なんですけど、時には情景描写もちゃんとやる、短い言葉でその場の状況をばーっと、聴衆、読者の頭に広げてみせる、そういう力を持っているという、そういうことだと思いますね。今だったら落語家でそういう人いますよね、一言でぱっとその日が暑い盛りだということがわかるというような、そういうことができる人いますけど、講談師もそうなんじゃないでしょうか、名人とかになると。

西田 ありがとうございます。

奥野 ありがとうございます。

西田 最初のところが押してしまったので、時間がなくなってしまったんですけども、南海さんにいろいろお聞きするという時間も大事なんですけども、実際にやはり講談をお聞かせいただきたいということがありますので、そろそろ、座談会は終わりにしたいと思います。さっきから何度も出てますよう

に吉沢コレクションはこれから研究が始まっていくところでございますので、またこういう機会を何度も持つことができればと思っています。それこそ続編、続々編というような形で、やっていければと思いますので、今日のところは南海さんにお聞きするという会はこれで終わらせていただこうと思います。どうも南海さん、ありがとうございます。

南海 ありがとうございます。

講演者紹介 **旭堂 南海 (きょくどう なんかい)**

昭和 39 年 兵庫県加古川市生まれ

平成元年 2 月 故三代目旭堂南陵に入門

同年 3 月 大阪大学文学部(国文学専攻)卒業

平成 8 年 「咲くやこの花賞(大衆芸能部門)」受賞

平成 21 年から「加古川観光大使」を務める

なみはや講談協会副会長

CD『太閤記(木下藤吉郎編)』(全 40 巻)、『太閤記(羽柴筑前守編)』(全 36 巻)、『難波(なんば)戦記(せんき)』(全 40 巻)を発売。

侠客伝『祐天吉松』(全 16 話)、『浪花(なにわ)五人男(ごにんおとこ)』(全 8 話)等を YouTube(無料)にて公開。

その他、地域の民話・伝説の講談、偉人伝、『太閤記』『関ヶ原軍記』『難波戦記』『大塩平八郎』『浪花(なにわ)侠客伝(きょうかくでん)』『浪花五人男』『関取(せきとり)千両(せんりょう)幟(のぼり)』など多数。